

令和2年 11月 18日

須賀川市議会議長 五十嵐 伸様

日本政府に核兵器禁止条約の調印・批准を求める意見書提出に関する請願書

請願者：福島県原爆被害者協議会

会長 木幡 吉輝



住所：〒

田村郡三春町

電話

紹介議員：

堂 脇 明 奈



【請願の趣旨】

日本政府に対し、核兵器禁止条約に署名、批准するよう求める意見書を提出すること。

【理由】

10月24日、国連において核兵器禁止条約が50か国の批准により、2021年1月22日より発効されることが決定しました。

条約は、核兵器は非人道的な兵器であり、国連憲章、国際法、国際人道法、国際人権法に反するものであるとし、歴史上はじめて明文上も違法なものとなりました。被爆者や多くの国民が長年にわたり切望してきた核兵器完全廃絶につながる画期的なものです。しかし、日本政府はこの条約を批准していません。

日本政府は、世界で唯一の戦争による被爆国として核兵器全面禁止のために真剣に努力すべきと考えます。その証として、核兵器禁止条約に署名、批准することを強く求めます。

広島・長崎に原爆が投下されて今年で75年。被爆者の平均年齢は82歳となりました。「核兵器のない平和な世界」は被爆者の願いです。非核平和宣言の市として、地方自治法99条の規定により、上記項目の意見書を採択し、国の関係機関に提出していただくようお願いいたします。



【自治体意見書・例文】

日本政府に核兵器禁止条約の参加・調印・批准を求める意見書

広島と長崎にアメリカの原子爆弾が投下されてから 72 年を経た 2017 年 7 月 7 日、歴史的な核兵器禁止条約が採択されました。

条約は、核兵器について破滅的な結末をもたらす非人道的な兵器であり、国連憲章、国際法、国際人道法、国際人権法に反するものであると断罪して、これに「悪の烙印」を押ししました。核兵器はいまや不道徳であるだけでなく、歴史上初めて明文上も違法なものとなりました。

条約は、開発、生産、実験、製造、取得、保有、貯蔵、使用とその威嚇にいたるまで、核兵器に関わるあらゆる活動を禁止し、「抜け穴」を許さないものとなっています。

また条約は、核保有国の条約への参加の道を規定するなど核兵器完全廃絶への枠組みを示しています。同時に、被爆者や核実験被害者への援助を行う責任も明記され、被爆国、被害国の国民の切望に応えるものとなっています。

このように、核兵器禁止条約は、被爆者とともに私たち日本国民が長年にわたり熱望してきた核兵器完全廃絶につながる画期的なものです。

2017 年 9 月 20 日、核兵器禁止条約への調印・批准・参加が開始されて以降、国際政治でも各国でも、前向きな変化が生まれています。条約調印国はアジア、ヨーロッパ、中南米、アフリカ、太平洋諸国の 84 か国。批准国は 2020 年 10 月 24 日、国連軍縮週間の初日に 50 か国となりました。これにより、同条約は 2021 年 1 月 22 日に発効します。

アメリカの「核の傘」に安全保障を委ねている日本政府は、核兵器禁止条約に背を向け続けています。こうした態度をただちに改め、「唯一の戦争被爆国」として核兵器全面禁止のために真剣に努力する証として、核兵器禁止条約に参加、調印、批准することを強く求めます。

以上、意見書を提出します。

年 月 日

内閣総理大臣 殿

外務大臣 殿

〇〇〇市町村長

(〇〇〇市町村議会)

「長崎原爆での救助活動に出動」

—これだけは次世代に書き残さねば—

木幡吉輝

私は、昭和四年生まれで、今年八十九歳になります。

昭和初期に生まれ育った世代は、戦中派と言われ激動の時代を経験しました。昭和六年に満州事変、昭和十三年に日中戦争があり、太平洋戦争は昭和十六年に始まりました。

私達の年代は、戦争するために生まれてきたような時代でした。大人の人は戦争に行ってしまうので、高学年の人達は勤労奉仕として、学校を休んで農家の手伝いです。子供たちは、「欲しがりません、勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」と言って我慢して生活したのです。

昭和十七年、私は中学校へ入学しました。中学校と言っても、その頃は六十名中、七・八人の進学でした。中学一年生の時から、行軍と言って、諫早中学校から雲仙までの三十数キロの道を、鉄砲を担いで行軍するのです。上級生の進軍ラッパで出発するのですが、朝八時に中学校を出発し、夕方四時頃雲仙に着きました。

兵隊の服装なので、ゲートルを巻き、革靴をはいて行進するのです。

人絹のゲートルなので、解けるし、足には豆はできるし、散々の状態でした。

冬になると、上半身裸になり乾布摩擦です。それも、たわしで教官の号令にあわせてこするのです。

寒いので、夢中になってこすると、血がにじみでてくるのです。何十回もやっている間に、たわしが柔らかくなったことを思い出します。この様な軍隊式教育で訓練するのですから、体は丈夫になりましたが、惨めな青春時代だったのです。

中学三年生になると、学徒動員として、海軍工廠で発動機の修理作業をさせられました。油にまみれたエンジンを、軍手もかけずにチェーンで吊り上げるのです。スパナでナットをはずすのですが、滑って手の皮がシリンダーでむけるのです。冬などは、冷たくて滑るので大変な仕事でした。

戦雲厳しい毎日でしたが、日本が戦争に負けるなど、夢にも知る由もなく、ただ勝つことだけを信じ、学徒動員として発動機の修理部で、一般工員と共に働いていたのです。

その日は、修理する発動機が少なかったので、松根油の原料となる、松の根掘りに近くの山へ出動を命じられました。

八月の日本晴れの天気だったので汗まみれの労働でした。昼近く小休止していたところ、突然の大爆発の音がしました。空爆でもないのでと思っていたら、諫早から二十五キロも離れた、長崎の方向に黒煙がもくもくとたっているのです。

広島に新型爆弾が投下されたことは知っていましたが、まさか長崎にもその爆弾が投下されたとは思ってもありませんでした。

「松の根掘りの学徒は、全員救助に行け」との命令で、トラック二台で長崎市にむかいましたが、眼前に現れた情景は、この世のものとは思えない地獄絵図だったのです。

長崎から諫早へ逃げてくる人達は、ほとんど裸に近い姿で男女の区別がつかないのです。そして、「長崎の町には、もっと酷い人達がいるので、助けて下さい」と泣き叫んでいるのです。

救助活動とはいえ、自分達も仰天状態で、「助けて下さい」という悲鳴を聞いてもどうしてよいのか、何から手をつけてよいのか、無我夢中の心境でした。

周囲は死体の山とうめき声、しかも真夏の八月です。死んでいる人々の目元や口元には蠅がぶんぶんたかっているのです。生きている人の顔に赤チンをつけてやるのですが、顔全体が傷だらけなので、み

るみる真っ赤になっていくのです。

また、生きている人の傷口の蛆虫を取るのも大変でした。取ろうとすると、すぐに肉の中に入っていくのです。ピンセットで取るのですが、それは大変でした。

隣では軍医が麻酔もしないで、若い女の人の脇の下をはさみでバリバリと切っているのです。そのときの「ヤメテクダサイ、ヤメテクダサイ」という悲しい叫び声は、今でも忘れることができません。体験談を話すときなど、今でも無意識に涙声になるのです。

生き地獄の中で手を震わせながら仕事をしていると、「何を震えているんだ」と、兵隊に気合をかけられ、「お前たちは死体運びだ」と言われて死体運びもしました。二人で担架にのせて運ぶのですが、遠い山の中そのうえ坂道なのです。顔も見ることのできない状態の人々を死に物狂いで運んだのです。山の中では穴を掘って死体を埋める係りの人達は、恐怖の形相で倒れそうになって仕事をしていました。私たちも何十回運んだのか記憶がありませんが、十六歳だった若者には恐怖のあまり何回も倒れそうになりました。

「よくぞ生きていたものだ」の一言に尽きます。

夜は夜で野宿がまっています。夜食として大きなにぎり飯が一個ずつ配給になったのですが、昼間の恐怖の惨状が目には浮かんで平常、口にするのできない銀飯ものどを通りませんでした。

一晚中、昼の生き地獄の恐怖と蚊の大群で一睡もできませんでした。こんな生活を四日間続けたのですが、四日間どんな仕事をしたのか、また友人が何人もいたはずなのにその名前さえ思い出すことができないのです。ただあの幽鬼のような人々の姿と臭気と叫び声は、永遠に私の脳裏から離れません。

夢遊病者の状態で諫早に帰ったものの、諫早中学校の校舎の中や校庭も被爆者の死体の山だったのです。死に物狂いの状態から開放されたと思いきや「一難去つてまた一難」の心境でした。

そしてあの四日間の野宿生活を思い出し、放心状態の生活が続きました。何日かすると真っ黒だった髪の毛が薄くなっているのに気がつきました。学校生活が始まり下宿の生活になりましたが、体がだるく食べても吐き気がして気持ちが悪いです。医者も原因不明で「栄養失調だ」と言って、なんの処置もできませんでした。

中学五年生になると髪の毛もだんだん黒くなりましたが、嫌な生活が続きました。

何はともあれ、あの悲惨な現状を体験した者にとって「戦争」という二文字は、絶対に許されぬまた絶対に再現してはならないことなのです。

「国を興するのは、教育である」「教育で日本の国を再建せねば」と決意したのもこの戦争、原爆の悲惨を体験したからです。「教え子を絶対に戦場にやらぬ」という信念を貫いて教育してきました。二度とあってはならぬ地獄絵を後の世に経験させたくないためなのです。また原子爆弾というまさに市民を殺すために投下した爆弾。罪なき多くの市民の頭上に投下し、無惨にも灼熱と放射能の地獄に突き落とされたのは爆弾。<sup>原子</sup>このことだけは記録にとどめ、体験しない人、また子々孫々に至るまで語り伝えたかった体験であります。この決意と信念は生ある限り変わることはないでしょう。